

# 幼時の追憶

その四、就學

## 抽ノ木の父母

當時の大洲の肱川には今のやうな立派な鐵橋は無かつた。澤山な舟を並べて、その上に板を敷いた、見るからに風流な橋がかゝつてゐたが、大水の出る度に流されて、あたりの河原も、その度に處ミ形を變じてゐた。抽ノ木の川べりもいつも浸水して、一番低い家には軒まで水が來た。泥水の上を舟が屋根をすれすれに行き來してゐたことを想ひ出す。平和な田舎も大水で時ならぬ大騒動をしてゐた。

小學校へ行く途中に掘切があつて、そこを出るミ石屋が三四軒並んでゐる。今でも石屋はあるが、その一番端に叶ミいふ家があつた。父の妹の嫁入り先で、主人はいつも赤い顔をして、酔つぱらつてゐた。三四人の子供があつたが、不思議なこゝには私と同年で同名の子がゐた。早生れであつたのか、同級ではなかつたが、中學にはいつて間もなく亡くなつた。同年同名の子はさちちかゝ負けるものだ

## 曾 根 保

さいふ迷信が當つたのださいふ人もあつた。

叶の主人の妹は、當時相當有名なヴァイオリニストに嫁いでゐた。家は大洲から母の里、ハタキへ行く途中にあつた。高い石垣の上に白壁の塀が夕陽に映えて美しい眺めであつた。大きな蘇鐵が繁つてゐた。何處か都會の音樂學校の先生をしてゐられたミ見え、休みで歸つたのだミ話してゐられたのを記憶してゐる。私がヴァイオリンさいふ樂器を始め見、その音を聞いたのはこの家でゝあつた。廼兄は琴や明笛が上手だミ聞いてはゐるが、幼兒の私にはそれを見たり聞いたたりした記憶が無いやうである。するミ、ヴァイオリンが、樂器としては一番最初に私に知られたものらしい。今日、私が「ヴァイオリンが弾けますよ」ミ言つても殆んミ誰も冗談ミしか聞いてくれないだらう。尤も近來は手にしたこゝもないが、實は「すばらしい」ヴァイオリンを一つ愛藏してゐるのである。これには一つの物語がある

が、それは後の「代用教員時代」の一項として述べることにしよう。

さて、抽ノ木の父は、役場から歸るに、水を汲んだり、風呂を焚いたり、庭に打水をしたり、通りを掃いたり、少しもぢつこしてゐない人であつた。夕餉の時、ちびちびみお酒を飲んで、赤い顔をして、白い象牙の長いノコ箸を巧みに使つて食事をしてゐられた。夏はお椽で食事をいたゞいてゐるが、頭の眞上には鮎の串刺が吊つてあつた。父は投網の名人で、私も一晚お伴をしたことがあつた。薄暗い、冷い水の中で熱心に鮎を探つてゐられたが、私には退屈の上ないこゝで、一度で懲りぐりしてしまつた。

お役所の宿直の時であつたらう。私は父の寢臺に入れて貰つたが、翌朝家へ歸つての話しに、「昨夜は保が寢臺から轉げ落ちてばかりゐるので眠れなかつた」と閉口の體であつた。これが、寢臺に寢た最初の記憶である。役場へは度々お使に行つたので、今でもその建物が朧氣に眼の前に浮んで來る。

役場から少し行くに小學校があつた。柳の多い通りで、お城が東の方に見えてゐた。私はこの小學校へ始めて入學したのである。ズツクの鞆を肩にかけ、袴をはいて通つた。この頃のこゝであらう。近所の女の子が私をからかふ時いつも、「ソデ、タモト、やーい」と呼んでゐた。曾根保をもち

つて思ひついたニック・ネームだが、私はその機智に少々感服してゐる。私のニック・ネームはその後、中學校時代には病弱で青白かつたため、「青さん」となり、現在ではSONEのドイック語讀みに、「象」を通して「ゾーン」となつてゐるらしいが、後の二つともお話しならぬ愚物の考案である。中學校時代の先生に捧呈したニック・ネームなどには恐ろしく穿つたものが多かつたが、近頃はさういふ風かしら。

小學一年の同級生に中學校の校長さんの息子がゐた。色白の聰明な子で、私はとても好きだつた。その頃洋服を着てゐる子供は小學校でこの子唯一人であつた。水兵服を着て、ランドセルを背負つた姿には何とも言へない魅力があつた。家は脇川を渡つた川向ふにあつたが、二三次學校の歸りに連れられて行つたことがある。今は名前も想ひ出せない遠い遠い昔の話になつてしまつた。

母は通りに面した表の間で針仕事をしてゐられた。眉毛を剃り落してゐられた。近頃は眉毛を落した婦人に出遭はないが、その頃はさういふ風習だつたのであらう。眉毛を落した人は母一人では無かつた。母は籠臺の前に坐し、側には大きな唐金の火鉢があつて、それにはいつも鋺が突差してあつた。火鉢の取手には唐獅子が口を開いてゐた。左右對をなして大きな口を開いてゐた。正面の大きな戸棚には仕立物が幾つも並べてあつた。母の内職なのであらう。

おやつ頃の頃になるに私は外から馳け込んで火鉢の横に身體をくねらせて、「ね、おくれよを繰返したものだつた。

母は振り向きもせず、鏝を取つて頬に近づけ、熱し加減を見てゐられた。時には人差指で鏝の腹に觸つてゐられた。こどもあつたが、「ね、おくれよ」の連發に對してきまつて「お暮が濟んだらお正月」に應酬してゐられた。それには今も耳に残つてゐる一つの調子があつた。お店の椽は狭かつた。夕方になるに疊んで掛金にかけるのであるが、この椽に、ちり紙や草鞋を置いて、通りを往くおへんぎさんにお布施をしたものである。小さい子供でも、人に惜しみなく與へるここの嬉しさを禁じ得ず、時には通り過ぎて行つてしまつたおへんぎさんを追つかけて施したこどもあつた。家の前が豆腐屋であり、うこん屋であつたせいか、おへんぎさんが疲れた足を止めるこどもが多かつた。中には目鼻の定かならぬ病人も交つてゐた。鼻の無い人が時々あつたが、その譯を聞いても、母の説明はたゞ恐い病氣のためさういふだけだつた。當世はもうあのやうな怪物は世上から姿を消してしまつたやうである。それさもマスクなきゝいふ便利なものが出現して多少見分けがつかなくなつたののかも知れない。

こんな事情が知らないが、この母が突如として姿を消してしまつた。小學校へ上つて間も無い頃の出來事である。

私にまつては大事件に違ひなかつた。するに、程なく船頭さんが數人やつて來て、箆笥や長持の類を運んで行つた。折角なついでに母を失つた子供は、さびしい幾日かを父と祖母とにいたはられながら過すこゝになつた。程なく丸鬘の美しい母が見えた。初めは、さういふものか、私はなつかなかつた。二尺さしを振り廻はして叩きつけたこどもあつた。しかし、母の里に連れて行かれて遊ばして貰つたのは嬉しかつた。大洲から八幡濱へ行く途中に野田さいふ村があるが、母の里はその街道筋にあつた。家の前に小川があつて、母の弟が、そこで魚を釣つてくれた。歸る時、御飯をすゝめられて、一杯で止めたまゝころ、「一杯では腹の下は通れない、二杯食べるものだ」驚かされた。後に私が、代用教員をしてゐた時、郡視學が授業視察に來て、一同を怖がらせたが、それが何と、その昔街道の小川で私の爲に魚を釣つてくれた母の弟であつたのには驚いた。

### 泳ぎを習ふ

尋常一年の夏、私は肱川で泳ぐこゝを教はつた。その教授法は巧妙を極めてゐて、自分の子供が近年プールで水泳を習つてゐるのを見て、もさかしさを禁じ得なかつた。川には大きい友達が數人ゐて、五米ばかりの繩を崖から崖へ張り渡し、それを傳つて一方から他方へ到着することを命ぜられた。臆病な私は恐しくてこゝも渡れさうにもなかつ

だが、他の私より小さい子供までやつてゐるのミ、もし大きい子供の命令に反くミ一大事なのであるから、思ひ切つてやるこゝにした。仲間外れにされるこゝは、子供の世界では一番大きな問題であるから、病弱な私なき、いつも大きい子におきかされてゐた。そこに父親の手のミダかぬ教育もあるのであらう。さて恐る恐るその繩を命の繩ミ、一生懸命につかまへて中途まで進んで行つた、バタバタ足で水を蹴りながら。實に必死の業なのである。するミ今迄二人の男の子が張つてゐたその繩が急につかまへやうもなく、弛められてしまつた。今はそんな繩に命を托しては居れない。兩手の力のあらん限り、バタバタ水を掻いて、或は沈み、或は浮き、水も相當に飲んで泳ぎに泳いだ。眼は見えない。しかし努力は報いられて近くの岩に、目的の岩に、到頭かぢりつくこゝが出来た。ぢつミ私の動作を見つめてゐた男の子は「よし」言ひ放つた。アアアア云つて、水からやつミ顔を上げた私は、半泣になつてゐたが、男の子の賞讃の聲を聞いて、嬉しくなつた。遂に私は泳ぎを教はつたのである。その間實に數分を出でない。泳ぎは正にこの手に限るミ、私は今も確信してゐる。子供の頃、よく人が犬の子を川に捨てるのを見たこゝがあるが、犬もやはり同じやうに泳いでゐる。即ち人間も實際は生れながら泳ぎ得る動物に造られてゐるのである。私は今も、龜山の岩角を想

ひ出して、あの男の子、あの川に感謝をさゝげる。

### エアリ・ビーコン

エアリ・ビーコン エアリ・ビーコン

あの楽しい景色！

戀人が私のミころへ登つて來る時

エアリ・ビーコンから見た町や州の

エアリ・ビーコン エアリ・ビーコン

二人寝ころんだ楽しい時よ！

エアリ・ビーコンの羊齒深く

夏の日中を語り合ひつゝ

エアリ・ビーコン エアリ・ビーコン

あゝ私には味氣ない處

エアリ・ビーコンに一人ぼつち

あの人の子を膝にのせて

——チャールズ・キングズレ——